

杉の子

奥多摩町立氷川小学校
学校便り 5月号
令和5年 4月29日発行

異なる見え方を想像する

校長 松井 良

6年生は国語の学習で、「帰り道」という話を読み進めています。「律」と「周也」という二人の登場人物のそれぞれの視点から書かれた文章を基に、二人の心情を読み進める学習です。教科書には、学校からの帰り道の情景をそれぞれの視点で描いた二つの文章が載っています。ちょっとした勘違いや、捉え方の違いによって、いつもより少し心の距離を感じている二人のやり取りが書かれた内容となっています。事実としての言動はどちらの側からも同じように示されているのですが、発信する側と受け取る側で、一つの言動の見え方が異なり、その捉え方も異なります。互いに心の距離を縮めたいと願っているのですが、相手の気持ちが分からず、もやもやとした気持ちをもち続けながら話は進んでいきます。

担任を務めていた頃、理科のテストで、「太陽は、(ア)から昇り(イ)に沈む。(ア)、(イ)のそれぞれに当てはまる語句を書きましょう。」という問いに対して、ある児童が(ア)は「左」「(イ)は「右」と回答しました。理科のテストですので、正解は(ア)は「東」、(イ)は「西」となります。しかし、この児童の回答は間違いとも言えません。日本の多くの学校は、南向きに建てられています。児童が毎日見る風景は、南を向いた校舎の中の教室から眺める景色となります。南を向いたとき、太陽の昇ってくる「東」は左側になり、「西」は右側となります。反対に、北を向いて観察したときには、「東」は右側で、「西」は左側となります。東西南北の方角で真理を捉えると、太陽は「東」から昇り「西」に沈みます。それを見る私たちが、どちら側を向くかで見え方は違ってくるのです。

今年3年ぶりに青梅マラソンが開催されました。30kmの部の最大の難所と言われるのが、復路の軍畑から二俣尾にかけての急な上り坂です。シドニー五輪女子マラソン金メダリストの高橋尚子さんが、その坂の手前でランナーにハイタッチをして元気付けてくれました。さらに、「この先のきつい上り坂では、足元だけを見てください。」とアドバイスしてくれたのです。言われたとおり、足元だけを見てみると、急な上り坂にもかかわらず、平らな道と勘違いしてしまうのです。視野を狭め、見える範囲の中に上り坂と認識できる情報を入れないことで、平坦な道と錯覚させられたのです。

「上から見ると三角形、横から見ると長方形、さてこの立体はどんな形でしょう。」と問われたとき、「三角柱」だと回答するためには、異なる視点からの見え方が想像できなくてはなりません。サッカーのテレビ中継を見ていると、「なんであのスペースにパスできないんだ!」と感ずることがあります。しかし、多くのサッカー中継はグラウンド全体を見渡せる高い位置のカメラから映像を届けています。選手がピッチ上から眺めている見え方とは大きく異なります。その違いを想像できると、「なんであのスペースが見えないのか」という疑問もすぐに打ち消されます。



人は経験したことを基に、経験していないことを想像します。友達と意見が食い違ったり、勘違いや捉え違いからトラブルを起こしたりすることを経験していく中で、自分とは違う見え方があることに気付く、互いを理解し合おうと寄り添う経験を積むことで、自分とは違うものの見え方についても、受け入れることができるようになります。喧嘩やトラブルも経験値を上げる上では大切な体験なのです。

6年生は、「律」と「周也」の視点で書かれた二つの文章を読み進めるとき、「律」の見え方と、「周也」の見え方を想像しながら、互いに抱くもやもやについても疑似体験できていたようです。

「人生は一度きり」、豊富な経験を誰もがまんべんなく積むのは難しいことですが、読書による疑似体験で、たくさんの経験が積めると考えられたら、本を読むことへのワクワクが止まらなくなりますか。

